

外国人教師たちの銅像

木下 直之

大学院人文社会系研究科 教授

明

治の彫刻を振り返って、高村光太郎がひどいことを言っている。

「大熊氏廣作の大村益次郎像は九段靖国神社前に日本最初の銅像として今日でもその稚拙の技を公衆に示してある。しかし此等の諸氏（引用者注：大熊のほかは近藤由一、藤田文蔵）は本来塑造家としての素質無く、その作るところ殆ど見戯に等しい観があつて、何等の貢献をも日本彫刻界に齎してゐない」（「長沼守敬先生の語を聴く」『中央公論』一九三八年七月号）。

すでに種を明かしたようなものだが、光太郎が「真に優秀な技術をし、卓抜な彫刻家として」高く評価したのは長沼守敬ひとりであった。光太郎のいうその証をこ覧に入れよう。

「帝国大学構内赤門の通路と、龍岡門横門の通路との交叉する十字路の一角、樺の巨木を背景として広く翼を張つた花崗石の台石の上に設置せられた内科のベルツ教授と外科のスクリバ教授の両胸像は、恐らく構内を往来する何人も一度は仰ぎ見た事があるであらう。又同大学正門からの通路を理科の赤煉瓦に沿つて歩んだ者は、その美しい並木の中に英人ダイヴァース教授の胸像のある事に気づいたであらう。此等の胸像こそ長沼守敬先生の手に成つたものである」。

ここに紹介された三体の胸像は、建立から百年が過ぎた今もなお、東京大学構内に健在だ。ベルツとスクリバは、御殿下グラウンドのすぐ隣から、彼らが基礎を築いた大学病院をじっと見守っているし、化学教師だったダイヴァースは、理学部化学館の中庭に

ひっそりと佇んでいる。

もつとも、ベルツ像とスクリバ像は、はじめ現在位置よりも六〇メートルほど南にあり、ダイヴァース像は構内を転々とした。「東京大学百年史」部局史二によれば、「太平洋戦争勃発により、敵国人の胸像は処分されることになったが、化学教室はこの胸像を処分するに忍びず、台座からはずして化学教室図書室書庫の一隅に秘かに保存した」。戦後、一九六四年になって復活した。

ベルツ像とスクリバ像の移転は医学図書館の入る医学部総合中央館の建設にともなうものであったが、同じ医学部の外国人教師ミュレルの胸像が仲を引き裂かれて、元の位置に留まつたまま。小高い丘の上に立ち、やはり大病院を眺めていたはずだが、周囲の木々が繁つて、その中にすっかり姿を隠してしまった。頭から鳥の糞を浴びても、掃除をしてくれる人がいない。ミュレル像の作者は藤田文蔵である。高村光太郎の評価どおりに、明暗が分かれたことになる。

さらに、酷評されたあと二人の彫刻家大熊氏廣の手になる銅像もある。農学部三号館の玄関ロビーに置かれた獣医学教師ヤンソン像がそれで、なるほど光太郎のいうとおり、古風で稚拙な印象は否めない。

さて、これら五人の銅像の建立時期はいずれも一九〇〇年前後で、古い順につきのようになる。ミュレル像（一八九五年）、ダイヴァース像（一九〇〇年）、ヤンソン像（一九〇二年）、ベルツ像（一九〇七年）、スクリバ像（一九〇七年）。東京大学構内に

は七〇体を超える銅像があり、屋外に置かれた銅像だけでも十三体を数えるが、彼らが最初に銅像となった教師たちである。日本人教授たちがつぎつぎと銅像になるには、およそ二〇年後、一九二〇年前後を待たねばならない。

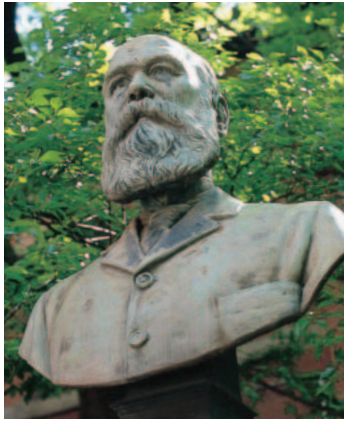
いうまでもなく、これは、東京大学の基礎がまず外国人教師、いわゆるお雇い外国人によつて築かれたこと、その最初の教え子たちが育つて母校に戻り、恩師の銅像を建て、やがて彼ら自身も在職二五周年を迎えたことが銅像建立の大きな契機となったことを示している。

銅像を見る楽しみは、必ずしも高村光太郎のいうように彫刻作品の鑑賞にあるわけではない。作者が誰かよりも、むしろ誰の像であるのかが決定的に重要であり、それがどのように生まれたのか、胸像のほかにも座像・立像とあり、なぜそのような姿で表現されているのか、ダイヴァース像の回転に見られるごとく、銅像はどのように位置を変え、あるいは変えずに今日にいたったかなどを考える面白さがある。

それはまた、大学の歴史をたどり直すことにつながるだろう。

外国人教師の銅像は、構内にあと二体ある。機械工学・造船学を教えたウエストと建築学を教えたコンドルの銅像が、工学部一号館の前庭に、左右に分かれ、まるで仁王像のように立っている。

それは工学部の歴史を伝えるすばらしい風景だったが、近年、仮設のプレハブ校舍が前庭にひたひたに繁つて、ミュレル像同様、姿を隠しつつある。



エドワード・ダイヴァース
(Edward Divers) 1837～1912
工学寮、工部大学校、理科大学
イギリス人教師

1873年に来日して化学を教えた。すでに来日以前から次亜硝酸塩の発見などの業績を持ち、1885年にはイギリス王立協会会員に選ばれた。1899年に帰国、東京帝国大学名誉教師の称号が贈られ、さらに翌1900年に、肖像彫刻が理科大学正面に建立された



エルヴィン・ベルツ
(Erwin von Baelz) 1849～1913
医学部 ドイツ人教師

1876年に来日、まず東京医学校で生理学と薬物学を教え、1877年に東京大学医学部が発足すると内科学を担当した。産婦人科学も、専任の日本人教授ができるまで受け持った。1892年に、医科大学名誉教師の称号が贈られた。1902年まで在職し、1905年にドイツに帰国



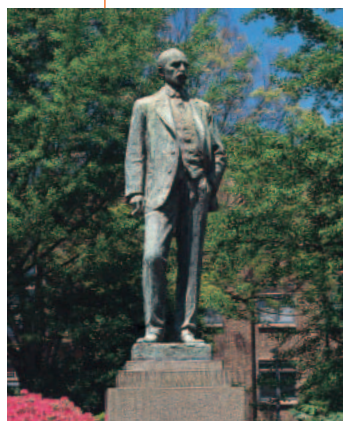
レオポルド・ミュルレル
(Leopold Müller) 1824～1893
東校、第一大学区医学校、東京医学校
ドイツ人教師

明治政府の招聘により、1871年に来日した。ミュルレルは外科のほか婦人科と眼科を教え、一挙にドイツ式の医学教育を展開した。3年の任期を終え、1875年に帰国した



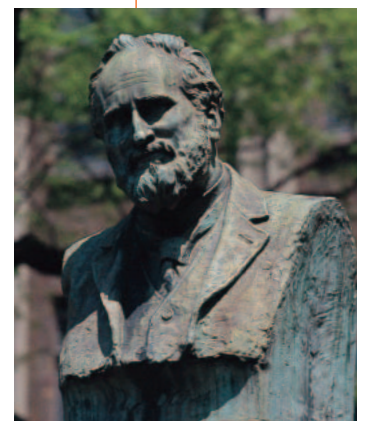
ヨハネ・ルードウィヒ・ヤンソン
(Johannes Ludwig Janson) 1849～1914
駒場農学校、農科大学 ドイツ人講師

1880年に来日し、1902年の任期満了まで獣医学を教えた。いったん帰国したあと、再び来日し、盛岡高等農林学校、第七高等学校ドイツ語講師を歴任し、鹿児島で没した



ジョサイア・コンドル
(Josiah Conder) 1852～1920
工部大学校 造家学科教師
イギリス人教師

1876年に日本政府と5年間の雇用契約を結んで、翌1877年に来日した。建築教育に従事する傍ら、上野博物館、鹿鳴館、東京大学法文教科校舎など、本格的な西洋建築を相次いで設計した。1886年に工科大学造家学科講師となるが、1888年に辞任、建築事務所を構えて設計の仕事に力を注いだ



チャールズ・ウェスト
(Charles D West) 1847～1908
工部大学校 アイルランド人教師

ヘンリー・ダイヤーの後任として、1882年に来日し、機械工学とともに造船学も教えた。そのまま日本に留まり、1908年に没した